

オーディオドラマ用脚本

テーブルの下のきらきら

景山伸子ナディア

## 登場人物一覧

加藤はるか（33）主婦
加藤正樹（35）はるかの夫
加藤結（4）はるかの娘
国松若菜（33）はるかの友人

はるかM「地震なんて自分の周りでは起こらない。怖いから、そう思い込もうとしてたのかもしれない」

カフェの店内音楽。

若菜「同級生の坂本いたじゃん。野球部の」  
はるか「うん」

若菜「亡くなったんだって。先月の地震で。結婚してあっちに住んでたらしい……」

はるかM「高校三年の夏、隣の席だった坂本くん。はじめて地震が自分ごとになった」

ドンと物を置く音。

はるか「水はひとり一日三ℓ、三日分はオツケー。次はトイレと防災食か」

結「ままみてーきらきら」  
はるか「結、壁にシール貼ったの!？」

結「きれいねー」

はるか「ノートについて言ったのに」

結「おそといきたい。ままいこー」

はるか「夕方だから明日。あ、これ見て」

風鈴を鳴らす。

結「わあ」

はるか「風鈴。この音聞くと涼しくなるから

夏に飾るんだよ」

ドアが開く。

正樹「ただいま。うわっ、何この荷物」

はるか「防災用の水」

結「ぱぱ！」

正樹「ただいま。（はるかに）通れないよ」

はるか「通れるよ。ちよつと狭いけど」

結「みてー」

風鈴が鳴る。

正樹「おー風鈴」

はるか「ねえ正樹。南海トラフって、どう思う？」

正樹「南海トラフ？　どうした急に」

はるか「少しは対策しておこうかなって」

正樹「まあどのスパンで見るかで確率は変わるよな」

はるか「三十年で八十%だって。だから水買ったの。トイレと防災食はこれから」

正樹「そんな焦らなくても」

はるか「いざって時に後悔したくないもん」

正樹「……とりあえず水、移動しようか。ここにあると危ないかもしれないし」

鳥の囀り。

パソコンのキーを叩く音。

はるか「あー、コーヒークップにもシール貼

ってる。起きたら言わなきゃ」

コーヒーをカップに注ぐ。

はるか「正樹。はいコーヒー」

パソコンのキーを叩く音が止まる。

正樹「はるか、ちよつといい？」

はるか「ん？」

正樹「先月のカード明細、防災用品の合計出してみた。さすがに買いすぎじゃない？」

はるか「でも、家族を守るには必要でしょ」

正樹「防災グッズたくさん買うのに冷蔵庫空

なのは守ること？」

はるか「あ……昨日はバタバタして買い物行けなくて」

正樹「最近ずっとそんなだよ」

はるか「それは」

正樹「今をおろそかにしたら意味ないんじゃない

ないかな」

はるか「……」

正樹「防災も大事だけど、いつ来るかわからない地震のことより今週のことを」

はるか「（遮り）一気に言わないでよ！ 私だって考えてる」

結「けんかしてるの？」

はるか「ごめん。起こしちやった？」

正樹「……ちよっと出てくる」

ドアの開閉音。

はるか、ため息。

はるか「家の中揺らしてどうするの……結、テレビでも見ようか」

子供向けアニメの音楽。

結「ゆいがまほうかけてあげる。ままげんきになあれ！」

はるか「……結」

洗い物をしている。

時計の針がカチカチと進む。

結「おそとくらいー。ぱばまだあ？」

はるか「そろそろ帰ってくると思うよ。さつき連絡来たから」

地震アラート音。

はるか「え……地震！？」

ガタガタと揺れ、食器が割れる。

はるか「結の悲鳴。」

はるか「テーブルの下へ！……え、停電？」

結「まま……」

はるか「大丈夫、大丈夫だから」



揺れがおさまる。

はるか「正樹に電話……あ、こういうときは  
救急車の連絡が取れにくくなるから電話は  
ダメだ」

深呼吸。

はるか「LINEのアイコンを無事の画像に変  
更。ダウンロードしといて良かった……震  
源地、結構近いんだ……ここは震度5」

ドアが開く。

正樹「ふたりとも無事か!？」

はるか「正樹!」

結「ばば!」

正樹「良かった。あー、食器割れてるな」

はるか「怪我してない?」

正樹「大丈夫。LINEしようとしたらアイコ

ンに無事って出て安心した」

はるか「変えておいて良かった」

結「ぱぱこっちきて」

正樹「テーブルの下？」

結「うん」

はるか「スマホで足元照らすよ」

正樹「テーブルの下だといつもと景色が変わ

るな：：今夜は余震があるかもしれない」

結「だいじょうぶ、だいじょうぶだから」

はるか「それ私の真似？」

正樹「ママが守ってくれたんだな」

シールを剥がし、貼る音。

はるか「結どうしたの？ テーブルの下にシ

ールなんて貼って」

結「きらきら。にこちゃん」

はるか「シール見るとにこって笑顔になるっ

てこと？」

結「うん！」

正樹「確かにテーブルの下から出られない  
時こういうのあるといいかもしれない」

はるか「私……」

正樹「どうしたはるか？」

はるか「守るってなんだろうって」

正樹「え？」

はるか「買いすぎでも防災用品用意しておき  
たかったし、シールいろんなところに貼らな  
いでよって思ったけど……」

正樹「……結、一枚シールちょうだい」

結「はい」

正樹「ありがと。パパはここに。どう？」

笑い出すはるかと結。

はるか「なんで自分の顔に貼るの」

正樹「笑った」

はるか「え……」

正樹「家族のために一生懸命なのはわかって  
るから。スーパ―とか色々行ってきた」

はるか「買ってきてくれたの？」

正樹「備えと日常、どっちも大事だなんて」

はるか「……ありがとう」

正樹、窓を開ける。

正樹「窓開けておこう。クーラーつくまで」

はるか「正樹。顔のシールもらっていい？」

テーブルの下に貼りたい」

結「ゆいも！」

正樹「じゃあ、みんなで貼るか」

結「はるー」

はるかM「テーブルの下で輝くシールを見て

思った。この笑顔を守りたいから備える。

家族と一緒に」

遠くで風鈴が鳴る。

〈終〉